

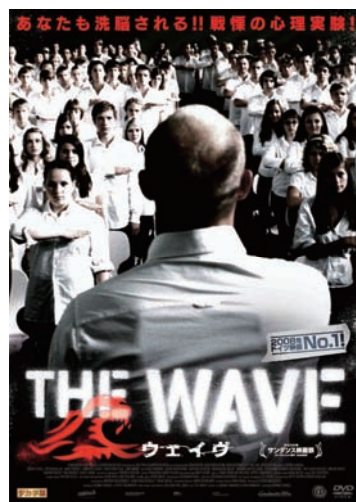
教師の教育の自由と責任

黄 海玉 (筑波大学大学院/教育制度学)

ウ エ イ ヴ

(原題: THE WAVE)

- ◆ 種別: DVD ビデオ (映画)
- ◆ 監督・脚本: デニズ・ガンゼル
- ◆ 発売/販売: アット エンタテインメント株式会社
- ◆ 製作年: 2008 年
- ◆ 製作国: ドイツ
- ◆ 時間: 本編 107 分+特典
- ◆ 音声: ドイツ語、日本語
- ◆ 字幕: 日本語字幕、デカ字幕、日本語吹替字幕



©2008 CONSTANTIN FILM VERLEIH GMBH

あらすじ

ドイツの高校教師ベンガーは、旧東ドイツで反政府運動に従事していた過去を持つ。実習授業で「無政府主義」を担当しようと意気込んでいたが、割り当てられたのは「独裁制」であった。授業にやる気のない生徒たちに困惑し、手探りの中、ある提案をする。それは、クラスを独裁国家に見立てた心理実験のような授業であった。挨拶や制服などのルールを決めて学ばせようとするが、独裁制に魅了された生徒たちは、ベンガーの予想を超えて学校内外で過激な活動を行うようになる。そして走り出した集団は、コントロールを失っていた。

シーン再現

<暴走し始めたウエイヴ (独裁制を学ぶクラスの名称) をめぐり、保護者や教師の間にベンガーの授業方針に対して反対の意見が現れた>

ベンガー: 教育的な目標がある実験です。生徒たちもやる気になっている。

校長: そうね、ただ保護者から電話があったの、イエンス (受講生) が先生の実習に夢中だと、職員室じゃ言えないわ、あなたのやり方に反対する人たちもいる、でも私は応援してますよ。

教育学の視点から

授業のはじめ、ベンガーは独裁制について質問を投げかけるが、生徒たちの適当な答え

Chapter	
1. オープニング	10'14
2. “独裁制”の授業	18'07
3. 集団の一体感	8'49
4. 白シャツ着用のルール	11'50
5. 暴走し始めたウエイヴ	7'10
6. 反逆者カロ	8'33
7. ティムの異常な行為	9'43
8. 制御不能	8'21
9. ベンガーの本音	1'30
10. 自分を取り戻したマルコ	4'06
11. 集団の狂気	12'59
12. エンディング	5'19



と独裁制に対する理解の不十分さに困惑した。そこで、「幸い実習では何をしても自由だ、気楽に行こう」と話し、実習が終わるまでの1週間、このクラスを独裁国家に見立てる実験を行うことを提案する。

ベンガーは生徒とともに、このクラスの指導者、規律、名称、ロゴ、ホームページなどを決め、独裁制の基本的な条件

を整えた。実習の途中で、反対する生徒や保護者、教師も出てきたが、校長の支持もあって中止されることはなかった。結果的には、生徒たちは独裁制に魅了され、暴走してしまう。実習を終えた翌日、ベンダーは生徒たちを講堂に集め、「今君たちがやっているこのこと自体が独裁である」と教え、独裁集団ウェイヴを解散させた。しかし、その場で生徒の一人が刑事事件を起こし、自殺するという悲劇が起きる。

この映画に描かれたドイツの学校の様子は、日本の現実と比べて非常に自由であり、とりわけ教師の教育活動は、驚くほど自由な裁量に任せられている。ドイツにおいては、1960年代後半以降、教師の教育上の自由が各州の学校法において保障されている。日本の場合は、憲法23条の学問の自由に含まれると解されるが、教育の自由は教師の個人的な自由ではなく、責任をもって職務を遂行するために保障されたものである（参照：結城忠『教育の自治・分権と学校法制』東信堂、2009年、149-158頁）。

教師の教育活動は、子ども、親、地域住民などに対して責任を持って行われる。それでは、ここにいう責任とは何か。責任の前提には自由が必要であり、自由がなければ責任もない。教育に対する責任は、教育内容と方法を決定し、実行した者が引き受けるほかない。ベンガーのように、自由な教育活動の結果として悲劇が生じた場合、教師個人は「責任」を負えるのであろうか。この作品では、ベンガーが警察に逮捕されるシーンで幕が降りる。

教師の教育の自由と関わって最高裁学テ判決（1976年5月21日）は、「普通教育においては…教師が児童生徒に対して強い影響力、支配力を有する」点に触れている。まだ十分な判断力を持たない子どもたちを教育する教師は、教育内容と方法を決定する際、この点を十分に考慮しなければならない。いかに自ら確信があつたとしても、それが誤っている可能性を排除してはならない。教師が巧みに（教育方法等によって）心理操作を行えば、憶説を子どもに信じさせることも可能だろう。しかしそれは、洗脳であって教育ではない。この作品は、教育と洗脳とはまさに紙一重であることを考えさせる作品である。

Information

※この作品は、1969年、アメリカ合衆国、カリフォルニア州のパロ・アルト市のある高校の歴史授業で実際に起きたことを映画化したものである。

【原作】モートン・ルー（著）小柴一（訳）『ザ・ウェーブ』新樹社、2009年。

【書籍】西田公昭『マインド・コントロールとは何か』紀伊國屋書店、1995年。